

東北大学大学院歯学研究科 インターフェイス口腔健康科学 第101回学術フォーラム

Forum for Interface Oral Health Science

歯内療法の潮流を俯瞰する

興地 隆史 先生

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
口腔機能再構築学講座歯髓生物学分野 教授
日本歯科保存学会 理事長

平成29年 1月27日（金） 17:30～18:30

歯学研究科大会議室（C棟 1階）

歯内療法の目標が徹底的な「感染源の除去」と「再感染の防止」であることは論を待たないが、その達成のための戦略にさまざまな変革の動向が生じたのは90年代中期であった。この種の潮流の胎動から約20年を経た現在、その間に実用化された多くの機材・術式が一定の評価を確立しているのみならず、今なお改良の動向が進展していることは特筆すべきであろう。

とりわけニッケルチタンロータリーファイルは根管形成の効率化に貢献する器具として普及が進むとともに、今なお改良が加えられている。また、手術用実体顕微鏡の導入により、根管内異物、レジ、穿孔などの難症例への対応に大きな福音がもたらされている。加えて、mineral trioxide aggregate (MTA)の開発や歯科用CTの応用など、この方面の話題は枚挙に暇がない。その一方で、これらの真価はエビデンスに基づいて確立されたトラディショナルな理念・術式とのコンビネーションにより、はじめて発揮されるとも言えよう。

本講演では、以上のような歯内療法の現況について概観したい。

連絡先: 第101回モデレーター 齋藤 正寛 (歯科保存学分野)